

『確実性について』の主題と構造（下）

鬼 界 彰 夫

Akio KIKAI: Subject and Structure of Wittgenstein's
On Certainty (3)

Abstract

In this paper, we investigate the nature of Wittgenstein's thinking that produced the text given us as *On Certainty* and try to extract the principles according to which Wittgenstein's thought-movement was actually produced. As a conclusion, we state that Wittgenstein's thought-movement was produced by the mutually interacted activities of the threads of thinking, which are acting themes existing in Wittgenstein's mind through-out the philosophically active period of his life. At each occasion of his philosophical thinking, several threads co-work and produce a sequence of thoughts which present itself as a series of "remarks" sharing a common topic. Thus his text always has the structure of a series of sequences in our sense. We apply these concepts to the first part (remarks 1-65) of *On Certainty* and show the structure of his thinking there as a demonstration of our view. In short, this part of the text is produced by four interacting threads of thoughts, whose themes are /Moore's assertion's interpretation/, /logical limit of error/, /criticism of idealism/, and /critique of the concept of knowledge as a mental state/. The complete analysis of the rest of *On Certainty* will be given in the sequel of this paper.

7 『確実性』におけるウィトゲンシュタインの思考の運動

7.1 これまでのシーケンス概念の問題点

前稿 6.1(C)で論じたように『確実性』第三部のテキストに見られる小節の継起構造は我々のこれまでのシーケンス概念が不十分であることを示していた。

すなわち従来のシーケンス概念に基づくかぎり第三部のシーケンス分析はおろか、そこにおけるシーケンスの存在を示すことすらできないことを第三部のテキストは示していた。第三部への適用においてこのように明るみに出た我々のシーケンス概念の問題点とは、シーケンスの内部構造が本質的に小節の単線的で直列的な継起であるという我々の漠然とした想定である。シーケンスがこうした内部構造を持つと考えるかぎり第三部は決してシーケンスの継起として理解されない。かくして我々はウィトゲンシュタインの思考の運動に関するシーケンス仮説を全面的に放棄するか、あるいはシーケンスの内部構造に関する別の想定を行うことを迫られたのであった。しかしながら我々のシーケンス概念のより根本的な問題点は単に内部構造を単線的・直列的と想定したことではなく、シーケンスの内部構造というものについて主題的に考察することなく漠然と単純な想定をしていたことそのものである。思考のシーケンスの内部構造について主題的に考察するとは、シーケンスを構成する諸小節間の内容上の相互関係について考察することではなく、そもそもシーケンスを生み出した思考の運動の本質的な在り方・性状について考察することであり、それは思考の運動を生み出す本体である思考するウィトゲンシュタインという精神の基本的な在り方と動き方を考察することであり、それはウィトゲンシュタインの思考の生成の諸原理について考察することに他ならない。それに対してこれまでの我々の分析は、多数の小節の途切れない連鎖として我々の前に存在しているウィトゲンシュタインのテキストをより理解しやすいまとまった単位としてのシーケンスへと分割することに焦点を置いていた。確かに我々はシーケンスを思考の運動単位として定義した。しかし現実の分析において行われたのはウィトゲンシュタインの思考の運動を追うことではなく、各小節から抽出された内容を比較し関係付けることであり、現実分析の対象となったのはウィトゲンシュタインのリアルな思考の運動ではなく、その痕跡であるテキストから抽象された思考の内容であった。それゆえ各シーケンスの中でウィトゲンシュタインの思考がどのように運動しているのか、シーケンスとシーケンスはどのような思考の運動によって結ばれているのか、といったことは全く考察されず、結果的に我々が取り出したシーケンスとは思考の運動単位でなく、思考の抽象的内容上のまとまりを持つ小節群にすぎなかったのである。

もちろんこれは我々の分析が無意味であったということではない。そもそもこうして抽象された内容を比較し小節の連鎖に区切りを入れるという作業なし

にはウィトゲンシュタインのテキストを前にして現実には思考の運動について考察をすることは不可能である。そうして区切られた小節群が現実の思考の運動単位であるシーケンスと全く対応しないということは極めてありそうにないことである。それゆえ本稿第四章から第六章（上）¹において我々が行った『確実性』第一部と第二部の「シーケンス分析」は本来のシーケンス分析のために必要な予備的作業だったということができよう。それは思考の運動単位としてのシーケンスの姿を捉えるためにはどうしても必要な作業であるが、同時にそれ自身ではシーケンスの影にしか触れておらず、思考の運動そのものを考察の対象としたさらなる分析によってのみ本当のシーケンス分析となるのである。本章の目的はかかる本来のシーケンス分析のために必要な考察をウィトゲンシュタインの思考の運動そのものとその原理について行うことである。その過程で思考のシーケンスという概念はそれを生み出した原理に溯ることにより再検討され、その結果シーケンスを生み出す原理として思考のスレッドという新たな概念が登場することになる。シーケンスとスレッドは思考する運動体としてのウィトゲンシュタインの精神が運動し思考を生成する際の二つの原理であり、同時にその痕跡である彼のテキストを我々が分析しそれを生み出した思考の原運動へと遡行する際に必要な二つの根本概念である。

本章でこうした考察をなした後、次章以降改めて第一部から第四部まで順次シーケンス分析を行い、その後にウィトゲンシュタインの思考の特徴について再度総括的考察を行いやや長くなった本論考を終結させたい。

7.2 思考の運動とは何か

ウィトゲンシュタインの思考の抽象された内容ではなく、現実の思考の運動を考察の対象とするためには、我々の論考の目的・動機にもう一度立ち返ることによって、思考の運動とは何なのか、それを把握し明らかにするとはどのようなことであり、そのためには何が必要なのかを考えることから始めなければならない。

我々のそもそもの目的は『確実性』として我々に与えられているテキスト、すなわち執筆時期に応じて四部に区切られた676の小節群 (Bemerkungen) にある読みを与えることであつた。その読みとは「ムーアの問題」という単一の主題を巡る単一の現実の思考の運動の軌跡としてこのテキストを解釈するという読みである。それは「ムーアの問題」という主題を巡って運動し活動し、結果と

して思考を生成した現実の一つの思考運動体の存在を前提とする読みであり、この思考運動体の活動の軌跡として『確実性』を解釈しようとする読みである。この思考運動体はウィトゲンシュタインの精神と厳密に同一ではない。なぜならこの同じ時期にウィトゲンシュタインの精神は「色彩」を始めとする他の主題を巡っても思考運動を行っていたことを我々は知っているからである²。我々がその存在を想定し、その運動を解明したいと考えているこの思考運動体は、それゆえ、「ムーアの問題」という思考対象に向き合うことによって存在する限りでのウィトゲンシュタインの精神なのである。この「ムーアの問題」と向き合う思考運動体の存在と活動の軌跡として676の小節の連鎖を読み解き、それによってこの思考運動体の存在を証示することが我々の原初的な目的であった。

我々の目的のこうした定式化における「思考運動」という表現の中の「運動」という語は厳密にアリストテレス的な意味での(エネルギーとは区別された)キーネーシスとして理解されなければならない。すなわち我々が「思考運動」というのは、それ自身を目的とし、時間や体力といった外的条件が許すかぎり際限なく行われる持続的思考活動としての思考のエネルギーではなく、固有の始まりと目的を持ち、その目的が実現したとき必然的に終結するという明瞭な時間的形態を持つ思考の継時的動きとしての思考のキーネーシスである。こうした思考の運動(キーネーシス)の固有の目的はそれが向き合っている問題の解明である。この問題が思考によって見いだされ自らに問いとして提示されたとき思考の運動は始まり、その問題が解明されたときそれは自ら終結する。仮にその後も同一人物により何らかの思考が継続されたとしても、それは別の思考の運動であり当初の思考の運動の継続ではない。膨大なウィトゲンシュタインの遺稿を『確実性』を始めとする幾つかの独立したテキストへと分割することに妥当性があるとすれば、その根拠は遺稿が複数の思考の運動(キーネーシス)の軌跡であるということに他ならない。このように思考の運動は内在的な固有の終結点を持つが、それは一旦開始された思考の運動がすべてこうした固有の終結点において自発的に終結することを意味しない。自らの問題を解明できないとき、あるいはその糸口すら見つけられない時、思考があてどなく延々と継続されることも十分にありうる。それは思考の運動と呼ぶに足る明確な形態を持たず、単なる思考の持続と呼ぶのが相応しいかもしれない。また別の場合には思考が自らの終結点に向かって明確な見通しと方向を持って進みながら、何らかの外的条件によって中断されることもある。あるいは途中まで明確な方向を持ちながらそれが次第に見失われることもある。

一般に思考の運動が思考の運動であるためには、明確な起点となる問題の提示と、それを解明するための方向と戦略をもった思考の継続が不可欠であるが、それがその後どのような経路を取り、どのような形で停止するのかが千差万別である。我々が『確実性』が「ムーアの問題」の解明を目的とするウィトゲンシュタインの思考の運動の軌跡であるというとき、我々は少なくとも次の1)から5)のことを意味している。1)『確実性』はその冒頭に明瞭な全体にとっての問題の提示部を持ち、その意味で明確な起点を持つ全体としての思考の運動の軌跡であること。2)その起点が内包する諸契機に従い明確な戦略と方向を持ちながら思考が開始・継続されそれは第二部まで持続すること。3) 第三部以降も思考は全体固有の問題の内的論理に従って進行するが、問題そのものの性質によって思考は次第に困難かつ複雑な経路を辿ること。4)最終的に思考者の死という外的条件により思考は停止するが、その時点に至るまで思考の進行は当初の問題の解明という目的と方向から逸脱することなく継続されること。5)従って思考停止時に到達された地点は、たとえ当初の問題の解明そのものではないとしても、それに向かって思考者ウィトゲンシュタインが最も接近した地点であり、その意味で彼の最後の思考の言葉として尊重されるべきものであること。我々の分析の目的とは上の1) —5) が事実であることを説得的に示すようなテキストの読みを提示することである。

7.3 『確実性』を生み出したウィトゲンシュタインの思考の運動の原理

以上の我々の目的は、『確実性』という数百の小節の連鎖の中からウィトゲンシュタインの思考の進行の経路を「ムーアの問題」という単一の目的を持った有意義なものとして浮かび上がらせ提示することによってのみ達成される。そしてこのことは、『確実性』を生み出したウィトゲンシュタインの思考運動が、ある問題を解明するためにどのような戦略を用いるのか、どのような経路で進むのか、そしてそもそもどのような仕方でも思考を生み出し進行させるのかといった、その思考運動としての一般的性向・特徴、すなわちその思考運動の原理を把握する者のみがなしうる事である。それ故ウィトゲンシュタインのテキストの具体的分析に着手する前に、以下において『確実性』のウィトゲンシュタインの思考運動そのものについての考察を通じてその原理を明らかにしたい。

7.3.1 ムーブメントー思考運動の最小単位

ある問題を解明しようとするとき我々はしばしばそれを関連する複数の下位問題へと変形・分割し、それら下位問題を解くことを通じて本来の問題を解明しようとする。そうした場合一つの思考運動の内部に複数の下位思考運動が存在し、前者は後者から構成されていることになる。こうした思考運動の入れ子構造は原理的には何層でもありうるが、現実の思考運動においてはその内部にもはや下位問題の解明過程としての下位思考運動が存在しないという思考の連続的継起が必ず存在する。これが言葉本来の意味での思考の運動の最小単位である。ある特定の思考運動、例えば『確実性』を生み出したワイトゲンシュタインの思考運動固有の運動原理を見いだそうとすれば、まずそこにおける思考運動の最小単位が何かを知らねばならない。というのも全体としての思考運動はこの最小単位の反復を通じて一つの構造を形成してゆくから、そこから直接運動原理を読み取ることは極めて困難だからである。思考運動が思考運動であるかぎりにおいて持つ最小限の構造がいわばむき出しになっている思考運動の最小単位においてこそ我々は運動原理を見いだす可能性があるのである。こうした思考運動の最小単位を音楽にならってムーヴメントと呼ぼう。こうして我々はまず『確実性』における思考のムーヴメントは何かという問いに直面するのである。『確実性』というテキストには、『確実性』全体、各部、各シーケンス、各小節という四つの層が存在する。我々はこれまで極めてあいまいな語法によってシーケンスを「思考の運動単位」と呼んできた。しかし思考の運動のより厳密な意味が明らかにされた今、こうした語法は改められねばならず、語本来の意味での思考運動の最小単位としてのムーヴメントがどのレベルに存在するかが問われねばならないのである。

『確実性』においてかかる意味でのムーヴメントは各部という段階において始めて確認できる。小節 (Bemerkung) とシーケンスという単位は起点と終点を持つ思考の運動 (キーネーシス) を内包するにはあまりにも「小さすぎる」のである。小節がこうした運動単位になりえないのは、それらの意味がシーケンスというより大きな文脈の中でのみ決定できるということから自明であるが、シーケンスも思考運動の単位 (ムーヴメント) にはなりえない。シーケンスの構造・成り立ちは多様であり、問題の提示と解明の過程と見做せるシーケンスが仮に存在するとしてもそれは極一部のシーケンスであり、シーケンス一般は問題の提示と解明という思考活動とは別の活動により形成される単位なのである。

このように部という単位が思考運動の最小単位であるとは、以下の分析で我々が次のことを示さなければならない事を意味している。先ず第一部から第三部までの各部がどのように複数のシーケンスから構成されてムーブメントとしての構造を持っているのかということ、そして『確実性』全体が三つの完結したムーブメントと一つの未完のムーブメントからどのように構成され全体としてより大きな思考運動の単位を形成しながらもその途中で中断されたか、ということである。こうしたことを示すには、複数のシーケンスがムーブメントという全体を構成する際に、シーケンスとシーケンスとを有機的に有意味に結び付けるものが何なのかを知らねばならない。これが活動する思考の糸としての思考のスレッドに他ならない。

7.3.2 スレッド—シーケンス的思考

本稿の第四章から第六章（上）でのシーケンス分析を通じて『確実性』というテキストの一つの特徴が浮かび上がってきた。それが、異なった主題を持つシーケンスが交互に現われ、数個の主題が飛び石状に連なりながら第一部、あるいは第二部という全体を形成しているという構造的特性であった。『確実性』を一体性のない思考のメモの集積とする立場からは、この現象は単なる偶然と見做さざるを得ないが、我々の立場からすればそれはウィトゲンシュタインの思考の運動の最も重要な原理の現われとみなしうるのである。例えば二つの大きな主題に交互に支配された一連のシーケンスからなるテキストが存在するとすれば、それは異なった主題を巡って活動する二つの思考活動体の存在と活動の痕跡であると解釈することができるだろう。そしてそれぞれのシーケンスはどちらか一方の思考活動体のその時々々の活動により生み出されたと考えることができるだろう。そしてこのように各シーケンスは一方の思考活動体の活動により生み出され、同時にその活動体が活動し現実化された場なのであるが、その間もう一方の思考活動体は停止あるいは休止しているのでなく、何か機会があればどの瞬間にも現実化できる状態にあるという意味で潜在的にそのシーケンスにも存在していると考えられることもできるだろう。事実ウィトゲンシュタインのテキストの多くの部分はこのような思考の活動様式を想定して初めて十分に理解できるものであると我々は考える。こうした活動様式を持つ二つの思考活動体は、どちらかが顕在的にシーケンスを生み出している間中、二つ共が常に同時に存在しているのである。更に多数のこうした思考活動体が同時に存在しながら単一の思考運動を形成してゆくということも想定でき

る。その場合、思考活動体同士の関係と活動の形態はより多様で複雑となり、例えば複数の活動体が一つのシーケンスを形成するという事も起こるであろう。こうした観点に立てばシーケンスとは一つあるいは複数の思考活動体が活動し現実化される場であり思考活動の同時的現在であり、同時にその現実化された活動が生み出した産物と理解されねばならない。我々が想定する思考活動体とはこうしてシーケンスとして実現化され我々の前に姿を現わす存在なのである。

こうした思考活動体が現実存在するならば、それを我々は思考の糸、すなわちスレッドと呼びたい。『確実性』を生み出したウィトゲンシュタインの思考運動の原理に関する我々の根本的な想定は、複数のスレッドが共存しながら様々な組み合わせで活動することにより次々とシーケンスを生み出し、その中でスレッド同士が様々な相互作用することにより原初的な問題の提示からその解明に至る思考運動を形成してゆくというのが『確実性』におけるウィトゲンシュタインの思考の根源的な在り方だ、というものである。こうした思考の在り方、思考運動の形成の仕方をスレッド—シーケンス的思考と呼びたい。ウィトゲンシュタインの思考は根本的にスレッド—シーケンス的であると我々は考える。スレッド—シーケンス的思考の利点は明らかである。それは一種の思想的並列処理であり、原初的な問題を複数の派生問題へ転換・分割し、それらの下位問題の解明を同時に進めることにより、その中から現われる新たな相互関係・派生関係を常にモニターしながら、常により包括的でより深化した解明の方向に思考の運動を向かわせるとにより、当初の問題の提示においては予想・予期されないような問題の拡がりや新たな知覚を可能ならしめるものである。こうした思考法をウィトゲンシュタインが終生手放さなかったのはほぼ確実であると我々は考える。

スレッド—シーケンス的思考の産物として『確実性』を解析するために、以下においてスレッドとシーケンスの両概念を今少し深化させたい。

7.3.3 スレッド（活動する思考の糸）とシーケンス（思考の現在地平）

今述べた我々の基本的な想定によれば『確実性』というテキストは相互に作用し合いながら活動する複数のスレッドにより生み出されたものである。それらの活動は相互に作用し調節されながらシーケンスを次々と生み出し、それを通じて思考のムーヴメントと呼びうる形態を四回形成し、それら四つのムーヴメント全体として一つの思考運動を形成していったのである。『確実性』をこ

うした活動の産物として提示しうるためには、個々のスレッドがどのように活動するのか、異なるスレッドがどのように相互作用するのか、スレッドの活動からどのようにしてシーケンスが生み出されるのかを明らかにする必要がある。

スレッドとはその活動が主題的統一を持つ継続した思考を生成するような思考活動体である。それゆえスレッドの中心にはそうした思考を生み出す活動を自らの内に内包するような存在がなければならない。それがスレッドの核である。スレッドの核には様々なタイプがあり、その多様性が限定されていると考える理由はないが、『確実性』第一部の分析において我々が遭遇するのは、問い、テーゼ、概念、の三種の核である。次章の分析で示されるように『確実性』第一部には、〈ムーアの解釈〉、〈誤りの限界〉、〈観念論批判〉、〈心的状態としての知識概念の批判〉という四つのスレッドが存在し、それらの相互作用する活動が第一部というシーケンスの連鎖を生み出したと解釈できるのだが、これら四つのスレッドに思考活動を与えている核は、問い、テーゼ、概念、のいずれかのタイプに属するのである。すなわち〈ムーアの解釈〉の核は「ムーアの言説の真価は何か」という問いであり、〈誤りの限界〉の核は「誤りの論理的限界」という概念であり、〈観念論批判〉の核は「観念論の正しい批判は何か」という問いであり、〈心的状態としての知識概念の批判〉の核は「知識は信念と比較されるような心的状態ではない」というテーゼである。これら三つのタイプの核はそれ自身の内に思考活動の原理をはらんでいる。すなわち問いはそれに対する答えを与え問いを解明しようとする活動を内包し、概念はそれをさらに拡張し細部を充実させ十全なものにしようとする活動を内包し、テーゼはその根拠と前提へと遡行しその妥当性を検証しようとする活動を内包している。一つの思考の運動においてこうしたスレッドの核が最初に出現する過程が我々がこれまで「問題の提示」とか「主題の提示」と呼んできたものである。スレッドの活動は、思考運動の問題提示部においてその核が出現したときにある潜在的な形で既に存在しているのである。スレッドが思考活動体として繋がりのある思考を生成しうるのはこのようにスレッドの核がその活動を内包しているからに他ならない。そして一つの思考の運動はそこに存在するすべてのスレッドの核の内に潜在的に内包されている活動が現実完全に実現されたとき完結し、運動としての潜在的な存在を失い停止する。それが「問題の解明」と言われるものに他ならない。しかしかかるスレッドの潜在的活動が本当に実現されるかどうか、それが具体的にどのような形で現実化されるのかは思考者をふく

めて誰にとっても事後的にのみ知りうることであり、これが思考の自由と創造性である。

このようにスレッドの活動は潜在的にその核の存在において既に決定されているが、それが実現されるのは具体的にシーケンスという言語的形態において思考を生み出すことにおいてであり、ここで各スレッドは自分以外のものとの関係を通じて自己を実現することを迫られる。すなわち思考の各スレッドの実現はシーケンスという具体的な言語的存在者が生み出されるある限定された形式の中でのみ達成される。そしてシーケンスが生み出される形式は、1) 単一のスレッドが支配スレッドとしてあるシーケンスを排他的に生成する、2) あるスレッドが支配スレッドとしてあるシーケンスを生成するが、そのシーケンスに他のスレッドの活動が貫入する、3) 複数のスレッドが活動し一つのシーケンスを生成し、支配スレッドと呼ぶものが存在しない、の三つである。これら三つの形式は現実のシーケンスにおいて観察されるものであるが、それらはスレッド同士の相互作用の言語的現実への投射であるから、この三つの形式の理解はスレッドの相互作用の理解においてのみ可能となる。

スレッドとスレッドの相互作用には合流と交差の二つが考えられる。合流も交差もしないスレッドは相互に無縁である。もし二つのスレッドが完全に無縁であるなら、仮にそれらが生み出すシーケンスが同一の紙片の上に隣接して実現されたとしても、それらは一つの思考運動の生み出した同一テキストに属するとは考えられない。その場合思考者は全く関連付けられない二つの主題について隣接した時間に思考し隣接した場所にその結果を書き留めたと理解されねばならない。例えばMS172とMS176における『確実性』のテキストと『色彩論』のテキストはこうした関係にあると理解される。それぞれを生み出した思考運動体は相互に無縁なのである。

合流は最も根本的で重要な相互作用である。もし複数のスレッドが合流することなくそれぞれ独立して自己を充足させ停止したとすれば、それらは同一の思考運動に属するとは言えないから、複数のスレッドが共同して単一の思考運動を形成するためには、それらが次々と合流してより大きな包括的なスレッドを形成し、それが充足されることにより思考の進行が停止するという過程がなければならない。それゆえスレッド間の合流は思考運動が成功裏に終結するためには不可欠な過程なのである。しかしあるスレッドと別のスレッドは任意に合流できるわけではない。例えばある概念を核とするスレッドと別の概念を核とするスレッドが合流しようとするれば、両概念を包括するような大きな概念を

整合的に構成する必要があるが、それは必ずしも容易なことではない。思考者の思考活動がそれをなしえないとき、二つのスレッドは合流できない。ある場合には両スレッドは無縁のまま終わるが、別の場合には合流には至らないがより瞬間的な形で二つのスレッドが触れ合うことがある。具体的には一つのスレッドが支配するシーケンスに別のスレッドが瞬間的に貫入するのである。これがスレッドの交差であり、多くの場合スレッドの交差を重ねながら両者を包括する思考の場が次第に準備され、最終的にそれらが合流するという経過をとる。

スレッドとスレッドが合流してより包括的な上位のスレッドを生成すると同じように、これまでスレッドと呼んできたものの中のあるものはその内に複数のより小さなスレッドを内包し、それらが合流した結果形成されたものである。こうした下位のスレッドをサブスレッドと呼びたい。例えば上述の〈ムーア解釈〉というスレッドは、{ムーアの論点の肯定的側面としての誤りの限界}、{ムーアの「私は・・・知っている」の誤用}、{ムーアの観念論批判の批判}という三つのサブスレッドから構成されるものである。スレッドはウィトゲンシュタインの思考運動の中を血管や葉脈の如き有り様で流れ、小さなスレッドが次々と合流しより大きなスレッドを形成してゆく。従ってどの太さの流れをスレッドと呼び、どの太さのものをサブスレッドと呼ぶのかを厳密に決定する基準はない。しかしながら下位の諸スレッド同士の関係とそれらと上位スレッドの関係が明白であり、それらがどのように合流するのが事前に簡単に予測可能な場合、それら下位スレッドをサブスレッドと我々は呼ぶ。この命名法の背後にある考えは、スレッドとスレッドの合流とは予測不可能な思考の融合過程であり、その意味でウィトゲンシュタインの思考運動における創造的過程であり、本来の意味での思考の生成過程と呼ぶにふさわしいものである、というものである。合流という概念をこうした過程にのみ適用したいと我々は考える。従って事前に予測可能な結合は合流というよりは予め単一のものの部分が集合する過程であり、そうした部分をサブスレッドと呼ぶのである。従って以下においてサブスレッド同士の結合過程は、「サブスレッドAとサブスレッドBが合流する」という風にでなく、「サブスレッドAとサブスレッドBがスレッドCを構成する」という風に記述したい。

さてこの合流という過程はある種の時間的経過を必要とする過程である。すなわち複数のスレッドの合流が完了し、それらが一つのスレッドになった後を考えるなら、そこには最早一つのスレッドしか存在しない。それが生成するシー

クエンスは単一のスレッドに支配されるシークエンスである。しかしこうした合流・一体化が完了する前を考えてみれば、そこには未だ複数のスレッドが存在している。すなわち複数のスレッドが互いに異なるスレッドとして別々に活動しながら一つのシークエンスを形成するという過程が存在するのである。ここではそれぞれのスレッドがあるシークエンスの一部として他のスレッドと独立に活動する場があり、そうした活動が生み出す思考の継続がある。それはスレッドの活動の最小単位であり、思考活動の息のごときのものである。これがサブシークエンスである。複数のスレッドが共存し活動し一つのシークエンスを形成する場合、現実にはそれぞれのスレッドが別のサブシークエンスを生成し、複数のサブシークエンスの連続としてシークエンスが構成されるのである。それら複数のサブシークエンスが異なるシークエンスではなく、一つのシークエンスの部分であるのはそれらの間に有意義な連関があり、それが未来の単一のスレッドを準備するからなのだが、それにもかかわらずサブシークエンスとサブシークエンスは明確に区切られ区別される。『確実性』においてスレッドとシークエンスを分析する多くの場合、サブシークエンスは極めて重要な意味を持ってくる。そして交差が行われるのも現実には本来一体のシークエンスの真中にサブシークエンスが貫入し、シークエンスが二つに分断されるという形で実現される。十分予想されるように、シークエンスとサブシークエンスの意味的つながりは極めて多様であり、合流に近い交差から、ほとんど無関係な突発的貫入に至るまでの様々な形態が見出されるのである。

以上はスレッド―シークエンス的思考の原理の抽象的解明にすぎず、その具体的内容は以下の各部の分析においてのみ示されうる。その分析においては先ず各部の小節のシークエンスへの分割が改めて示される。これは第四章から第六章（上）において示したシークエンス分割と大筋では同一であるが、一部変化がある。それはシークエンスの本性に関する我々の理解の進展を反映したものだとして理解されたい。ついで各部に存在する諸スレッドの相互作用の展開、合流の系譜が示される。これはスレッド分析と呼ぶべきものである。最後にそれらスレッドの活動がどのようにシークエンスとして実現されるのかがシークエンスごとに順次示され、それを通じて各部がどのようにシークエンスからムーヴメントとして構成され終結してゆくのが示される。以上が第一部から第三部について先ず示される。第四部についてはそれがムーヴメントとしてどのような地点で未完のまま停止したのが示される。

8 『確実性』第一部のスレッドーシーケンス分析

8.1 第一部のシーケンス分析

以下に示すシーケンス表は『確実性』第一部のシーケンス分析の最終的な結果、すなわち第一部の65小節をシーケンスとサブシーケンスへ分割した最終的結果であり、本章において『確実性』第一部のウィトゲンシュタインの思考の運動を解析し解説する上で最も基礎的な資料となるものである。これについて必要と思われる二つの解説を加えたい。

なお以下の叙述において原則的にシーケンスには大文字ローマ数字で「III」「シーケンス III」、「第一部シーケンス III」のように言及し、サブシーケンスには大文字ローマ数字と小文字アルファベットで「IIa」、「サブシーケンス IIa」「第一部サブシーケンス IIa」のように言及する。またスレッドには、後に示すように、小文字ギリシャ文字を用いる。また本表のサブシーケンス記号の前の {ムーア} という表記はそのサブシーケンスにおいてムーアに対する言及が少なくとも一回行われていることを示す。従ってそうした表記の無い他のサブシーケンスのテキストには「ムーア」の名は登場しない。

『確実性』第一部のシーケンス表

- I (§§1-9) 全編の主題の諸契機の先行的・発散的提示
- a (§1a) ムーアの観念論批判
 - b (§1b) ある事の証明不可能性
 - c (§2a) 皆にそのように思われる、から、それが真である、の導出不可能性
 - d (§2b) 疑いの限界
 - e (§3) 言語ゲームの手続きとしての経験的テスト
 - f (§4a) ムーアの言明の意味の不明確性
 - d' (§4b) 疑いの限界
 - g (§5) 命題の誤りの可能性の規定
 - {ムーア} h (§6a) ムーアの「私は・・・と知っている」の誤用
 - i (§6b) 確実性という心的状態
 - j (§7) 生活における知識の在り方
 - k (§8) 知識と確実性の区別

j' (§9) 生活における知識の在り方

II (§§10-18) 「私は・・・と知っている」の用法と概念

a (§§10-16) 「私は・・・と知っている」のムーアの誤用

b (§17) 誤りの限界

a' (§18) 証拠提示可能性主張としての「私は・・・と知っている」

III (§§19-24) ムーアと観念論の論争

a (§§19-20) ムーアの観念論批判の批判

{ムーア} b (§§21-22) ムーアの知識概念批判

c (§§23-24) 観念論の批判

IV (§§25-29) 誤りの限界としての計算の確実性 (とその規則による明示化不可能性)

V (§§30-34) ムーアの主張の再解釈

a (§30) 状態としての確実性概念批判

メタ哲学 §(31)

{ムーア} b (§32) ムーアの主張の再解釈

メタ哲学 (§33)

c (§34) 明示的に教えることからの限界

VI (§§35-37) 観念論批判

a (§35-36) 意味論的観念論批判

b (§37) その有効性への疑義

VII (§§38-42) 心的状態としての知識概念の批判

a (§§38-39) 心的状態という概念批判

b (§§40-41) 「私は・・・と知っている」の用法と機能

a' (§42) 心的状態としての知識概念批判

VIII (§§43-50) 計算の確実性が論理的規定であること (とその規則による明示化不可能性)

- a (§43) 確実性を表す命題の論理的性格
- b (§§44-47) 計算実践における確実性
- a' (§48) 確実性の規定の論理的性格
- b' (§§49-50) 計算実践における確実性

IX (§§51-60) ムーア言明が誤りの限界を表す論理的命題であること

- a (§§51-52) 誤りの限界を表す命題の論理的性格
- {ムーア} b (§53) ムーアの主張の再解釈（公的解釈）
- a' (§§54-56) 誤りの限界の論理的性格
- b' (§§57-60) ムーアの言明が文法的・論理的洞察であること

X (§§61-65) 言語ゲームと言葉の意味の変化

- a (§§61-62) 使用としての意味
- b (§63) 言語ゲームの変化
- a' (§64) 使用としての意味
- b' (§65) 言語ゲームの変化

前回の分析との関係 我々は今回のシーケンス分析を第四章でのシーケンス分析と独立に試みた。その結果は前回の結果と二箇所においてのみ異なるものであった。すなわち前回に「IV (§§25-34) ムーア命題について誤る可能性」として一つのシーケンスと考えた小節群 (§§25-34) を今回は「IV (§§25-29) 誤りの限界としての計算の確実性」と「V (§§30-34) ムーアの主張の再解釈」という二つのシーケンスとして解釈し、さらにまた前回「VI (§§38-50) 数学的確定性と「知っている」という表現」という一つのシーケンスと解釈した小節群 (§§43-61) を「VII (§§43-50) 心的状態としての知識概念の批判」と「VIII (§§51-60) 計算の確定性が論理的規定であること」という二つのシーケンスへと分割した。その結果前回の分析が第一部を八つのシーケンスに分割したのに対し、今回は十のシーケンスへと分割することになった。この結果について二つのことを述べたい。

我々の現在の見地からすればシーケンスは時には多くのスレッドの共活動により生み出されるものであり、そうした場合にはシーケンスの一体性、区切り、存在は極めて曖昧なものとなり、シーケンスの区切りの確定とシーケンスの主題の同定が困難になる可能性を秘めている。例えば今回の我々の分析

ではシーケンス V においてそうした現象が観察される。それに対して今回と前回の結果が二箇所においてしか異ならなかったこと、しかもその二箇所はいずれも新たな区切りの追加であり、前回の区切り箇所はすべて今回も区切り箇所とされたことは、シーケンスとシーケンスの区切りの存在、シーケンスの存在に対する新たな確証と考えることができる。すなわちそれはウィトゲンシュタインの思考がその都度シーケンスという明確な区切りを持った思考の現在地平を形成しながら進行するというシーケンス仮説を大筋において検証していると考えられる。

第二は前回との相違点についてである。今回我々は前回一体のシーケンスとみなしたものを分割した。この変化はシーケンスに対する我々の理解の進展を反映していると思ふであろう。前回我々はウィトゲンシュタインの一日の思考持続というものを一つの基準としてシーケンスの存在を想定した。従って長さという要素がシーケンスとシーケンスの区切りを決定する際の重要な要因となり、特に区切りが不明瞭な場合は十から二十の小節の長さというのが一つの目安となった。しかしながらシーケンスの生成過程に関するより明確な理解を得た今、分析においてこうした外的要因に頼る必要がなくなり、より短いシーケンスを確定することができたと考えられる。事実今回分割された二つの旧シーケンスの主題はいずれも二つの要素の並列であり、今回の分割によりその主題的統一はより明瞭となったと言えるのである。

このシーケンス表の読み方 今回の分析の結果であるこのシーケンス表は前回のものに比べ煩雑で見にくいと感じられるかもしれない。しかしこの表を正しく読めば、単に小節の区切りごとの内容の要約ではなく、ウィトゲンシュタインの生きた思考がどのように流れて運動し、第一部という全体を構成していったのかが読み取れるのである。

先ずこの表は各シーケンス欄の第一行に、ローマ数字のシーケンス番号、括弧内に小節の区切り、その後主題を示してある。例えばシーケンス I は第一節から第九節まで継続し、それらを統合する主題は「全編の主題としてのムーアの問題の諸契機を先行的・発散的に提示すること」である。この表を前回のものと大きく区別するのはこの後に各シーケンスを構成するサブシーケンスをそれを生み出した思考の糸と関連付けられるような仕方と順に並べてある事である。例えばシーケンス II の欄の二行目以降に a b a' と小文字アルファベットが三つ縦に並んでいるのは、このシーケンスが三つのサブシーケンスから構成されており、それぞれのサブシーケンスはアルファベットの後の

括弧内に示された小節から成り、その後示された主題を巡って展開されていることを示している。更にaba' という文字はこれら三つのサブシーケンスが無関係のではなく、ab という文字によってここで仮に表される二つの思考の糸（スレッド）によって生み出されたものであることを示している。すなわちシーケンスIIは二つのスレッドの共活動により生み出されたものであり、より具体的には第一のスレッドがサブシーケンスaとサブシーケンスa'を生み出し、第二のスレッドがサブシーケンスbを生み出したのである。

この点でシーケンスIは他のシーケンスと根本的に異なっているが、それは『確実性』全編におけるこのシーケンスの特別の役割を反映しているのである。このシーケンスのサブシーケンス欄にaからj'まで13のアルファベットが縦に並んでいるのは、このシーケンスが13のサブシーケンスから成り立っていることを示している。そしてそれぞれのサブシーケンスはムーアの問題という『確実性』全編の主題を構成するある契機を提示しているのである。ここで使われているアルファベットがaからkまでの11種類であるのは、このシーケンスで11の異なった契機が提示されていること示している。そしてその四番めのもとの十番目のものは二度登場する。更にこのシーケンスに九つの小節しか存在しないのに13のサブシーケンスが存在するのは多くの小節がその前後半で別の契機を提示し、結果として二つのサブシーケンスを内包しているからであり、そうした小節の前後半は(\$1a) (\$1b)、のように示されている。

更にシーケンスVのサブシーケンス欄に小文字アルファベットの代わりに「メタ哲学」という記入が二箇所現れるが、これは全体の思考の流れから独立したコメント、現在進行中の哲学的思考そのものに対する反省的コメントの出現を意味している。第一部で二箇所しかないそうしたメタ哲学的コメントがシーケンスVに集中しているということは、このシーケンスの戦略的重要性を示している。

このようにサブシーケンスのアルファベットはスレッドの変数であり、何らかの思考の糸を表しているから、それをシーケンス毎に繋いでゆくことにより、第一部を生成した思考の流れを再構成することが原理的には可能となる。現実にはそれはスレッドが合流して生み出した結論部からその起源へと逆に辿ってゆくことによってなされるだろう。第一部にはこうした意味での結論部が三つあり、それらはシーケンスVI, VII, IX、である。それら三つのシーケンスのサブシーケンス欄にはいずれもab二種の文字が使われており、それらが二

つのスレッドの合流によって生み出されたことを示している。従ってこのシーケンス表からウィトゲンシュタインの思考の運動を読み解くとは、それぞれの結論シーケンスを生成したスレッドの起源を順に溯れるところまで溯りながら各シーケンスのサブシーケンスを繋いでゆくことである。当然スレッドは溯るに従い枝分かれする。すべての枝がシーケンスIのどれかの契機にまでたどり着くとは限らないが、大多数の枝がそこまで溯るだろうことは十分に予想できるだろう。そのことこそが第一部の一体性を保証しているのだから。8.3で示されるスレッド展開図がこのパズルの解答に相当する。

8.2 第一部のスレッド分析（その1）—思考の大きな流れ—

上で予示的に述べたように第一部には<ムーア解釈>、<誤りの限界>、<観念論批判>、<心的状態としての知識概念の批判>、という四つの思考の糸（スレッド）が存在している。それらは第一部において相互に作用しあいながら活動し自己展開し、全体としてある一体性を持つ思考運動を形成している。その運動の軌跡が第一部と呼んでいるものに他ならない。これらのスレッドを順に α 、 β 、 γ 、 δ 、と名付ける。すなわちスレッド α とは<ムーア解釈>という問いを巡って、スレッド β とは<誤りの限界>という概念を巡って、スレッド γ とは<観念論批判>という問いを巡って、スレッド δ とは<心的状態としての知識概念の批判>というテーゼを巡って、それぞれ活動し展開する思考の糸である。I, II, …というシーケンスの名が各部の内部でのみ有効なローカルな呼称であったのに対し、 α 、 β 、…というスレッドの名は『確実性』全編に共通なグローバルな呼称である。すなわち<ムーア解釈>という主題（問い）を巡って活動し展開する思考の糸が現れれば、それが第一部においてであれ、第四部においてであれ、我々は α と同一の名で呼び、同一の思考の糸の活動の現れとみなす。これは我々がスレッドと呼ぶ単位が個々の思考の現場やテキストに関係なく在り続けるグローバルな存在であるという事態を反映したものである。すなわちこれらのスレッドは第一部のみならず、『確実性』というテキスト全体をも超えた存在様式を持つのである。例えばスレッド β <観念論批判>は『論考』においてすでにその活動を開始し、スレッド δ <心的状態としての知識概念批判>は『探究』において極めて重要な役割を担っていたスレッドと密接な関係を持っていると考えられる。

スレッドがこのような存在であり、『確実性』のテキストはすべてこうしたスレッドの活動により生み出されたものであるから、第一部といったまとまりを

持つテキストにおける思考運動の理解は、そこにおける各スレッドの通時的展開とスレッド同士の相互作用の解析を通じてのみ得られるのであり、それがスレッド分析に他ならない。スレッド分析において最も基礎的な作業は、各スレッドがどのように各シーケンスとサブシーケンスを生成しながら相互作用しつつ展開していくのかという過程の具体的で網羅的な解析であり、それを図式化したものが各スレッドの展開図と、スレッドの合流図である。次節で我々は四つのスレッド展開図と一つの合流図とを示したい。しかし展開図の説明に入る前にここで第一部全体の統一性について述べるのが適当であると思われる。なぜなら如何に詳細なスレッド分析を為したとしても、第一部に存在する四つのスレッドがどのように単一の思考運動を構成してゆくのが簡潔に示されない限り、第一部を単一のテキストだと主張できないからである。すでに述べたように全く無縁な二つの思考の糸が生み出すテキストはいかに互に入り込み合っようとも一つのテキストではなく、二つのテキストなのである。

第一部を一体の思考運動たらしめているのは、スレッド α を軸とした四つのスレッドの相補的結合である。すなわち第一部の四つのスレッドはスレッド α <ムーア解釈> を軸とした内的関係によって相補的に呼応し、この相補的呼応関係をもとにして相互作用し、第一部の一体性を構成してゆくのである。この過程を簡単に説明しよう。<ムーア解釈> という主題には「ムーアの批判」と「ムーアの評価」という対立する方向を持つ二要素が本来内在している。すなわちムーアの主張のどこを批判しどこを評価するかを確定することを通してのみムーアの解釈はなされるのである。そして一般にある主張を批判したり、評価したりできるのは、批判や評価の焦点となっている主題についてそもそもどのように語るのが正しいのかを知っている者のみである。批判と評価の主題に関して批判者・評価者が内的に所有すべきこうした規範的言説が批判の相補的思考と評価の相補的思考である。批判という活動は直接その対象に向けられた対象分析的批判思考と対象からは独立し焦点となる主題そのものに向けられた批判の相補的思考の共同によってのみ可能となり、同様に評価という活動も対象分析的評価思考と評価の相補的思考の共同によってのみ可能となるのである。こうした観点から第一部の他の三つのスレッド β 、 γ 、 δ とスレッド α の関係を考えてみると、スレッド γ とスレッド δ はムーア批判の相補的思考であり、スレッド β はムーア評価の相補的思考であることがわかるだろう。ウィトゲンシュタインがムーアを批判する焦点は、1) その観念論批判、2) その「私は知っている」の用法とその知識観、の二点なのだが、1) についてムーアを批判するためには

そもそものような観念論批判が正しいのかという相補的思考が必要であり、それがスレッド γ であり、2)についてムーアを批判するためにはそもそも知るということについて我々は如何に語るべきかという相補的思考が必要であるが、スレッド δ <心的状態としての知識概念批判>はこうして要求されている相補的思考の、全体ではないが、重要な部分を構成するものなのである。同様に第一部のムーアの積極的評価のポイントは、「私は自分に手がある事を知っている」を始めとするムーアの言明はムーアの個人的な知識を表明してはならず、「自分に手がある」という命題が我々の言語ゲームにおける誤りの限界であるという論理的洞察を表明しているものであり、その意味で哲学的に極めて興味深いものである、ということである。こうした評価が妥当であるためには、先ず「言語ゲームにおける誤りの限界」、「誤りの論理的限界」といった概念が確固としたものでなければならないが、この概念を十全なものにするための思考がこの評価の相補的思考であり、それがスレッド β なのである。

このように第一部の四つのスレッドの中で γ と δ はムーア批判の相補的思考としてスレッド α に内的に関係し、スレッド β はムーア評価の相補的思考としてスレッド α に内的に関係し、第一部全体はスレッド β 、 γ 、 δ とこうした関係を持つスレッド α に支配されているとすることができるだろう。すなわち第一部とはムーア解釈という大きな主題を巡って直接ムーアに向けられた思考とそのために必要な相補的思考が協働しながら運動した痕跡であると考えられるのである。この大きな思考運動の中で主スレッドである α と批判的相補スレッド γ 、 δ は合流することはないが、これはそれらの内的結びつきの強さを現していると考えられる、すなわちそれらは合流するまでもないのである。なぜなら観念論批判と「私は・・・知っている」の使用においてムーアが誤っていることは第一部のウィトゲンシュタインの思考にとって極めて確固とした自明なことであり、それら二点についてのムーア批判（すなわちスレッド α の一面）と相補的思考としてのスレッド γ と δ を結合させるのにいかなる媒介も説明も必要でなかったのである。それに対してムーアの積極的評価（すなわちスレッド α の他の一面）とその相補的思考としてのスレッド β の内的関係はそれほど自明ではない。つまり β がムーア評価の相補的思考となるためには、「私は・・・知っている」というムーアの言明は実は論理的洞察であるというムーア解釈が妥当でなければならないが、これは決して自明ではないのである。少なくともムーア自身はそうした解釈には同意しなかったであろう。それゆえこの特定のムーア解釈に関して吟味と正当化が要求されるのであり、第一部ではそれはシー

クエンス IX におけるスレッド α とスレッド β の合流として遂行される。その意味でシークエンス IX は第一部において最も微妙で重大な生成の場であり、同時に第一部の主要な結論部であるといえることができる。

しかしスレッド α <ムーア解釈> とスレッド β <誤りの限界> の相互独立性はこの合流によって一挙に解消されはしない。「ムーアが本当に意味していたのは論理的洞察か、それとも彼自身の知識の表明か」という問いは解消されず残るのであり、この問いを巡る思考は第二部以降の思考運動の中でその重みを次第に増してゆくのである。この問いに対する答え如何によってはこの二つのスレッドは完全に分離し、その結果ウィトゲンシュタインの思考の運動全体の方向も大きく変わりうるのである。こうした潜在的危機は今後の『確実性』の思考運動に常につきまるとしてゆくであろう。

8.3 第一部のスレッド分析（その2）—スレッドによる各シークエンスの生成—

以上の記述により第一部の思考の運動の大筋は明らかになったと思われるので、本節では各スレッドの展開図と簡単なその読み方を示し、その後各シークエンスの生成に関して特記すべき事だけを順に述べ、第一部の思考運動の分析を完了させたい。

各スレッドの展開図はそのスレッドが生成したサブシークエンスを順に矢印で結んだものである。図においてシークエンスとサブシークエンスはすべて記号で表示されているから、対応する小節番号や主題は前節のシークエンス表を参照することによって知ることができる。

各スレッド展開図に登場するサブシークエンスの記号には二種の表記法がある。第一は「IIa」のようにシークエンス記号とサブシークエンス記号が一体となって表示されるもので、第二はシークエンス記号を囲む長方形の中にサブシークエンス記号だけが「a」というように表示されているものである。第二の表示法はそのシークエンスが当のスレッドによって支配的に生成されていることを示し、第一の表示法はそのシークエンスが別のスレッドによって支配的に生成され、そこへ当のスレッドが貫入し交差していることを示す。

例としてスレッド β の展開図を見てみよう。この図は <誤りの限界> というスレッド β が {疑似と誤りの限界} というサブスレッド β_1 と {限界の論理的性格} というサブスレッド β_2 を内包しそれらから形成されていること、そして β_1 はサブシークエンス Id、つまり §2 の後半を起点とし、 β_2 はサブシークエンス Ig、

つまり§5を起点としていることを示している。 β はその後Id', IIb, IIIc, というサブシーケンスを次々と生成してゆくが、この図はシーケンス I, II, III, がいずれも β によって支配的に生成されたのではないことを示している。シーケンス I はすべてのスレッドの共通の起源であり、それを支配するスレッドが存在しないのでこれは当然である。シーケンス II, III についてはスレッド α の展開図を見てほしい。そこに II と III を囲む長方形が存在するが、それはシーケンス II と III がスレッド α によって支配的に生成されたものであることを示している。ここでスレッド α と β の展開図を対照させ、それぞれにおける IIb と IIIc の表記を比較すると、スレッド β は α が支配するシーケンス II とシーケンス III にそれぞれ IIb と IIc という点において貫入し交差していることがわかる。更にこれら二つの貫入地点の α の展開図での表記を注意深く観察すれば、それらはサブスレッド α_2 によっても貫かれていることがわかるだろう。すなわち IIb と IIIc はサブスレッド α_2 とサブスレッド β_1 の協働により生成されたのであり、これは二つのスレッドが上述の様に相補的に協働している一つの例である。

スレッド α <ムーア解釈> とスレッド β <誤りの限界> という互いに独立でありながらも内的に関連する二つの思考の糸のローカルで微妙なこの協働による思考の展開の様を、二つのスレッド展開図での IIb と IIIc の位置を確認しながらそのテキストである§17と§24を読むことによって確認されたい。その中から α と β という二つの思考の糸の運動におけるこれら二つの小節の戦略的位置も浮かび上がって来るであろう。これら二つの小節は、「誤りの限界」という概念を探查しようという思考（すなわちサブスレッド β_1 ）とムーアに好意的な評価的思考（すなわちサブスレッド α_2 ）を内包している。しかしそれらはいずれもシーケンス II とシーケンス III というムーアに批判的な思考（サブスレッド α_3 ）が支配する文脈の真っ只中で突然現れるのである。小節の直線的進行にのみ注意を払いながら読み進みこれらのテキストに遭遇した場合、それらと前後の小節の関係は見えにくく、それらは「難解な」個所と映るかもしれない。しかしムーアに批判的な文脈における評価的小節の出現という一見矛盾するかに見えるこの思考の組み合わせが、実は<ムーア解釈>というより大きな思考を構成する正負逆方向のベクトルに由来するものであることは、シーケンス V においてそれらが一体となり、§32において明示的にムーアに言及したムーア解釈を提示しているということにより遡及的に明らかになるのである。

ここでスレッド β の展開図に再度目を向けたい。 β の二つのサブスレッド β_1 と β_2 は別々に VIII を貫いたあと一つになっている。これが合流である。そこに

において β_1 と β_2 は別個に活動しそれぞれ b と b' 、 a と a' という二つのサブシーケンスを生み出しながら、その過程を通じてより大きなスレッドへと一体化する。すなわちそれまでは全く別の主題であった「疑いと誤りの限界」という概念と、その限界付けは論理的規定である、というテーゼが一体化し、「論理的規定としての誤りの限界」という主題が出現するのである。この主題、すなわち完成されたスレッド β はその後シーケンス IX において、「誤りの限界の表明としてのムーアの言明の再解釈」という主題としてのスレッド α と合流し、最終的に「ムーアの言明の意味は誤りの論理的限界の表明であり、その限りにおいて哲学的に興味深い」という第一部の最終的テーゼを構成するのである。

以上がスレッド展開図の読み方の実例であり、同時に第一部における最も重要なスレッドの相互作用の解説である。以下各シーケンスの生成と特徴について必要なことのみを順に述べてこの分析を終えたい。

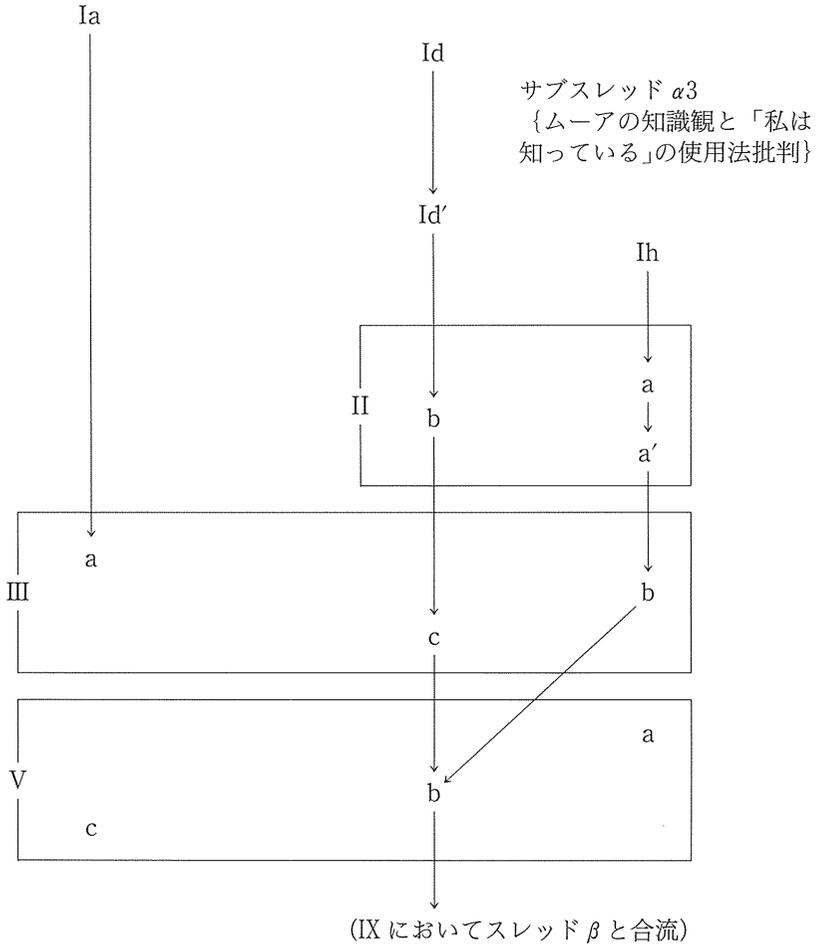
サブスレッド α <ムーア解釈>の展開図

サブスレッド $\alpha 1$

{ムーアの観念論の批判}

サブスレッド $\alpha 2$

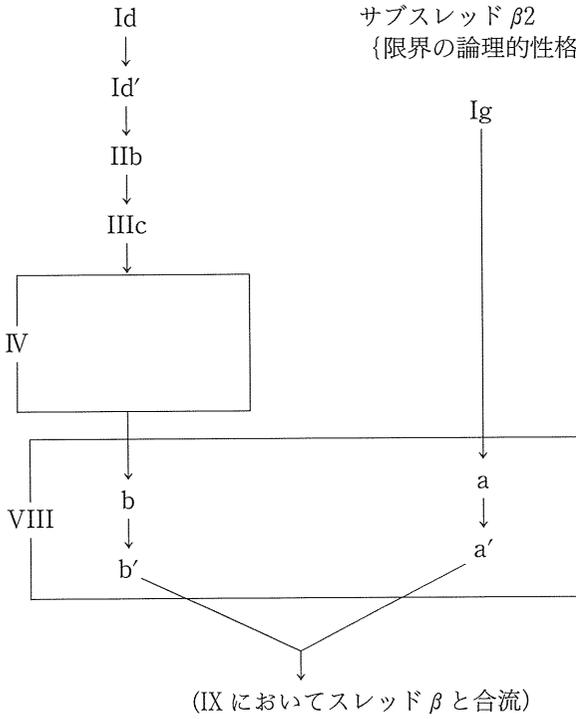
{ムーアの言説の積極的意義としての「誤りの限界」}



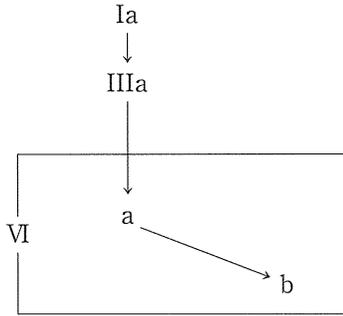
スレッド β <誤りの限界>の展開図

サブスレッド $\beta 1$
{疑いと誤りの限界}

サブスレッド $\beta 2$
{限界の論理的性格}



スレッド γ < 観念論批判 > の展開図

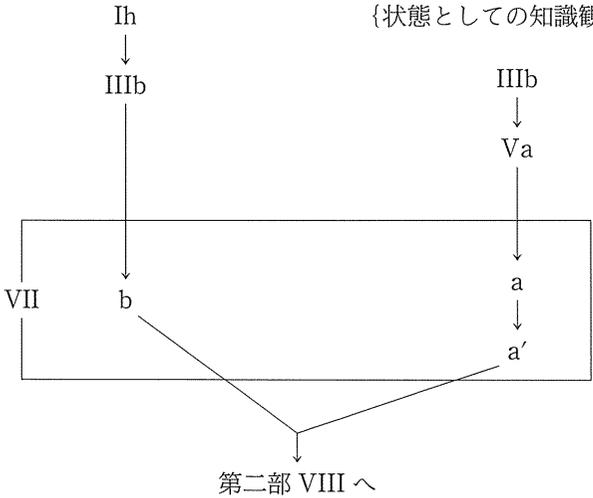


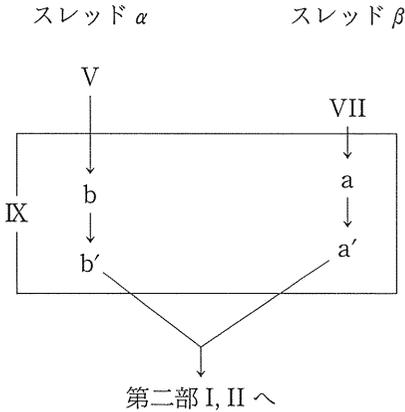
このスレッドはここで停止

スレッド δ < 心的状態としての知識概念の批判 > の展開図

サブスレッド $\delta 1$
 {「私は知っている」の用法}

サブスレッド $\delta 2$
 {状態としての知識観批判}



スレッド α とスレッド β の合流図

シーケンス I と X（ウィトゲンシュタインの思考の計画性について） 上のスレッド展開図を注意深く検討すれば、そこにシーケンス X が存在しないことに気づくだろう。これはシーケンス X の本質的特徴を反映した事態であり、その特徴はシーケンス I の一部も共有するものである。その特徴とは、形式的に第一部に所属しながらある意味でその外部に位置している、というものである。具体的にシーケンス I について説明しよう。シーケンス I で提起される a から k までの 11 の契機のうち上のスレッド図に登場するのは、a, d, g, h, の四つのみであり、サブシーケンスとして考えればシーケンス I からは a, d, d', g, h, の五つのみが登場する。四つの契機を体現するこれら五つのサブシーケンスのみが第一部を生成する四つのスレッドの起点となり、一体となった第一部の思考運動の有機的部分として「機能して」いるのである。別の言い方をすれば、これら四つの契機のみが第一部の思考運動において「使われた」のである。他方 b, c, e, f, i, j, k, という残りの七つの契機は第一部の思考運動では全く登場せず、それゆえそれら七契機を体現する八つのサブシーケンスは、第一部の他のテキストと全く関連を持たず孤立した島の如くに存在している。もし第一部の一体性を、すなわち第一部のムーヴメントとしての本質を、その各部分がスレッドにより複雑な仕方によってであるが一つに結ばれていることに存するとすれば、これら八つのサブシーケンスは定義により第一部に属さないことになる。この結論はある意味で真であり、ある意味で真ではない。それらは第一部に属し、かつ属さないのであり、それが第一部の本質なのである。

第一部というムーヴメントが持つこの二面的な性格は、『確実性』という全体におけるその戦略的位置を指し示すとともに、この全体が高度な戦略的展望に基づいて始められた思考運動である事を示している。そもそも『確実性』という全体を構成する最初のムーヴメントとして第一部には本来的に相反する要求がなされている。一方でそれはムーヴメントであり、一体の思考運動であるから、それ自身が全体であり完結した存在でなければならない。そうした完結性がなければ第一部の終点は単なる中断点にすぎず、第一部は第一部として存在しないからである。しかしもし第一部の完結性が文字通り完全なものであれば、開始された思考の運動はそこで終結してしまうだろう。すべての主題が尽くされ解明されるからである。その後の思考運動は別の運動とみなされねばならない。従って第一部と共に始った『確実性』という思考運動が第一部とともに終結するのではなく、なお第二部、第三部、・・・と継続すべきものと志向されているのなら、第一部の内に第一部では使用されない契機が提示されるのは第一部の本性からして必然的なことでなければならないだろう。シーケンスIはこれが事実である事を示しているのである。従ってシーケンスIで提示された11の契機のうち四つしか第一部で「使用され」なかったというのは、ウィトゲンシュタインの思考の不足を示すのでも、時間の不足を示すのでも、偶然の結果でもなく、そのように当初から計画されたことであつたと見なさなければならないだろう。残りの七つの契機は第二部、第三部、第四部において徐々に持ち出され使用されるのだが、第一部シーケンスIが出現した時、そうした事態はある種の解像度をもって思考者ウィトゲンシュタインによって既に見られていたと考えなければならないのである。ウィトゲンシュタインのテキストの複雑性はその思考の無計画性を示すのではなく驚くべき計画性を示しているのである。しかしその計画性は何かが予め実質的になされてしまっていることにより可能となる計画性ではなく、存在もせず予期もできなかったものの出現としての創造と両立するような種類の計画性であり、この計画性、プロットがウィトゲンシュタインの思考の大きな特徴であるように思われる。それは存在するものを他者に対して物語る既存のプロットではなく、存在しないものを在らしめる未存のプロットである。

以上の様な意味でシーケンスIの一部は第一部に所属しながらその外部に位置しているが、全く同じ意味でシーケンスXも第一部に所属しながらその外部に位置する。シーケンスXは第一部の最後に位置するが、そこで展開される思考（すなわち言語ゲームと言葉の意味の変化という主題）はそれまでの

第一部に全くその起源を持たないものであり、それゆえ思考の展開というよりは新しい契機の提示と呼ぶのがふさわしいものである。しかし「言語ゲーム」という言葉がそこで突然使われているからといって、それが単なる気まぐれで挿入された『探究』的思考のリヴァイヴァルでないことは、第二部シーケンスIIにおいてこの契機が極めて重要な役割を果たすこと（具体的には§§96—99のサブシーケンスの展開において）、そしてこのシーケンスIIが第二部にとって決定的に重要なものであることが遡及的に示すであろう。従って第一部シーケンスXは、第一部を完結させたウィトゲンシュタインの思考がその継続として第二部を展望した段階で、その十全な展開に必要でありながら第一部シーケンスIでは提示されていなかった「言語ゲームの変化」という契機を追加提示したものだとして理解すべきなのである。

シーケンスIIとIII（ウィトゲンシュタインのテキスト読解の独特の困難さについて） これら両シーケンスについて語るべきことはほとんど上で語られている。ここではそれらが体現するウィトゲンシュタインのテキスト固有の困難について述べたい。小節の直線的進行にのみ着目してこれら両シーケンスを通読すると、それらは互いに独立した主題に関する考察としか見えない。それらの考察が第一部全体とどう関係するのか、『確実性』全体とどう関係するのかに至っては全く見当が付かないものにしか映らない。その結果これら二シーケンスで展開されている思考そのものは理解可能であり、一定の哲学的興味を持つのととらえられるのだが、全体におけるその位置・意味合いは曖昧なままに終わる。かくしてウィトゲンシュタインのテキスト特有の消化不良感と困難さの実感が残るのである。こうした典型的なウィトゲンシュタイン読み体験は、ウィトゲンシュタインの思考が複数のスレッドの相互作用と相互調整から生み出されるというその本質に対する無自覚によるものである。シーケンスIIとIIIはその先にシーケンスVを予期する思考が生み出したものであり、更にその思考はその先（すなわちシーケンスIX）で別の思考と合流することをも漠然と予期しているのである。こうした予期と展望の実際はそれを包括する契機がシーケンスIにおいてa, d, g, h, として既に提示されていることが示しているのである。こうした予期と展望を想定しなければ、第一部シーケンスIの存在は謎としてとどまらざるをえないのである。

シーケンスIVとVIII これら両シーケンスも思考運動におけるそれら

の戦略的位置を自らは語らないために、スレッド β <誤りの限界>という思考の糸の存在を知らない者には理解可能で有意義ではあるが全体の中での位置が不明瞭なテキストと映るであろう。計算や数学的知識という主題が確実性という全体のテーマに何らかの関連を持つものであることは明らかであったとしても、それに関する思考を通じてウィトゲンシュタインが何をしようとしているのかは決して明らかとならないのである。しかし現実ここで運動しているウィトゲンシュタインの思考が狙っているのは「誤りの論理的限界の表明としてのムーアの言明」という明確なものであり、それにいたる中間駅としての「誤りの論理的限界」という概念の探査と確立のための最初の数歩がここで歩まれているのである。すなわち計算という領域は、実践における誤りの論理的限界の存在が最も見えやすいものとして選ばれたと考えられる。つまり我々が検算を二十回もする者を普通ではないと判断するという事実の中に、「誤りの論理的限界」という概念の明瞭な露出があるとウィトゲンシュタインは判断したのである。

これらのシーケンスについてもう一つ述べるべきことがある。それはこれらの生成に関与しながらも、上のスレッド展開図に全く姿を現さない思考の糸の存在である。それは第一部でいかなるシーケンスもサブシーケンスも自らが支配的に生成することがないため、明確なスレッドとして第一部に存在するとは言えず、そのためスレッド展開図に姿を現さないのである。いわばそれは見えない思考の糸としてのみ第一部に存在するのである。しかしこのことはこの見えない思考の糸がウィトゲンシュタインの思考の運動にとって重要な意味を持たないことを意味するのではない。その逆である。この見えないスレッドとは「言語ゲームの規則の明示的言語化の不可能性」あるいは「ムーア知の内容の明示的言語化の不可能性」といった表現を与えうる主題を巡って活動する思考の糸であり、第一部ではシーケンスIV、VIII、IXにおいて、より具体的には§§27、28、44、45、46、51においてその姿を現す。いうまでもなくこの見えないスレッドは「語り得ないもの」というウィトゲンシュタインの思考に存在し続ける重要な思考の糸と深く関わるものであり、『確実性』の思考運動の今後の展開においても重要な意味を持つものであり、我々の今後の分析に置いても常に注目してゆきたい。

シーケンスVとIX（決定的な思考融合の場について） ウィトゲンシュタインの思考の運動単位（ムーブメント）は常に複数の契機、複数の思考の糸か

ら出発し、それらに関係づけ統合しようという活動に貫かれている。それゆえある運動単位が運動単位として現実に存在しているとは、こうした統合の努力が成功裏に実現されたということであり、その統合の可能性が必ずしも自明でない複数の思考の糸が合流し結び合わされる場、微妙な相互作用が試されつつ実現される場が存在したということである。そうした場は何らかのシーケンスとして実現されねばならないが、そうしたシーケンスをクルーシャルシーケンスと呼びたい。別の観点からすればこのクルーシャルシーケンスとは思考の糸が一見すると入り乱れ、時には纏れていると見えるような場である。ウィトゲンシュタインにおいてそうした外見を持つ場はしばしば戦略的に重要な役割を果たしているが、それはその場が決定的な融合が試みられているクルーシャルシーケンスであるからに他ならない。第一部においてはシーケンスVとIXがこうしたクルーシャルシーケンスである。クルーシャルシーケンスにはしばしばその核となるサブシーケンスや小節が存在する。それらはクルーシャルサブシーケンス、クルーシャルリマーク、と呼ぶべきものであるが、とりわけクルーシャルリマークは極めて濃密で、どこか不透明さを残したという印象が残る小節として我々の前に姿を現すことが多く、当然の結果として研究者にしばしば引用される箇所となっている。シーケンスVではVbと§32が、シーケンスIXではIXbと§53がそれぞれクルーシャルサブシーケンスとクルーシャルリマークである。二つのクルーシャルリマーク§32と§53はいずれもムーアの言明を論理的命題と再解釈しようというものであるが、ある意味で『確実性』第一部を構成する幾つもの思考の糸はこの二つの再解釈の場を軸として相互に作用し結びつき合っているのである。シーケンスVに現れる二つのメタ哲学的小節はこうした激しい運動の余韻であると言ってもよいであろう。

シーケンスVIとVII(思考の運動の結論部について) 幾つかの契機として出発する思考の糸は他の思考の糸との相互作用と合流を経ながら、それが元々内包していた契機を思考として使い果たした時停止する。こうした停止の場となるシーケンスをその思考運動単位の結論部と呼ぶことができよう。『確実性』第一部はこうした意味で三つの結論部を持っている。すなわちシーケンスVIとVIIとIXである。すでに述べたようにこの中でシーケンスIXが第一部の主要な結論部であり、主要な思考の糸がそこへ流れ込んでいる。他方スレッド γ <観念論批判>とスレッド δ <心的状態という概念の批判>は上で述べた

ようにこの大きな流れと相互作用しながらも、独立した思考の糸としてそれ自身の終結を迎え結論部を構成するのだが、それがシーケンス VI と VII なのである。それらは一方で他の思考の糸と思考運動内の有機的結合を保ちながら、他方で全く独立した考察として存在し読まれうる。こうしたテキストの存在はスレッド—シーケンス的なウィトゲンシュタインの思考の一つの特徴である。こうして終結した思考の糸は、思考の運動のその後の展開によっては再びそれに関わり活動する可能性を秘めている。現実にはスレッド δ がそうした経過を辿ることになる。他方スレッド γ は『確実性』の思考運動において再びサブシーケンスを形成するような活動に従事することはない。こうした二つの思考の糸の運命は『確実性』全体という思考運動の中で見れば必然的なものであるが、既に述べたようにそれは遡及的にのみ予見可能な必然性であり、事前には何人も予見する事のできない思考の自由の産物に他ならない。

注

- 1 筆者の不注意のため本稿には第六章が二つ存在している。本稿（上）の「6 第二部—外在的視点から見られた限界」と本稿（中）の「6 『確実性について』第三部の思考の本質的特徴とそれを明らかにするための方法」の二つである。混乱を避けるために前者を「6（上）」あるいは「第六章（上）」と、後者を「6（中）」、「第六章（中）」と呼ぶ。ただし節に分かれているのは後者のみなので、「6.1」等の表記には「（中）」を付けない。
- 2 ウィトゲンシュタイン最晩年の遺稿、すなわち MS169—177はその主題に従って『確実性について』、『色彩に関する考察』、『心理学に関する最終草稿第二巻』という三つの書物としてアンスコムやフォン・ライトらによって編集され出版されている。ウィトゲンシュタインの遺稿とその出版の経緯と現状については、フォン・ライト（飯田訳）「ウィトゲンシュタインの遺稿」と飯田隆「遺稿の出版状況について（訳者追補）」（共に飯田編『ウィトゲンシュタイン読本』法政出版、所収）を参照されたい。